

# 骨粗鬆症性椎体骨折と胃酸逆流症状 との関連について

— 整形外科的因子, 内科的因子からの検討 —

なが み はる ひこ  
長 見 晴 彦

キーワード：逆流性食道炎, 骨粗鬆症性椎体骨折, 食道裂孔ヘルニア,  
脊椎アライメント

## 要 旨

高齢化社会において骨粗鬆症多発性椎体骨折は大きな問題である。脊椎異常のみならず多症例において随伴する胃酸逆流症状による患者のQOLの低下が問題である。今回、自験の骨粗鬆症性椎体疾患患者で同時に胃酸逆流症状（GERD）を有し内視鏡的に食道胃接部の観察、またピロリ菌感染の有無などを検査し得た98症例につき内科的因子、整形外科的因子との関連性を検討した。内科的因子（食道裂孔ヘルニア、ピロリ菌非感染）、整形外科的因子（椎体骨折数4個以上）がGERD発生の危険因子であった。近年骨粗鬆症治療であるビスフォスフォネート製剤やGERD治療薬の普及は目覚しく患者QOLは向上している。しかし60歳以上の患者ではその脊椎アライメントの評価により早期から骨粗鬆症を予防し、また随伴する上腹部症状の治療も必要である。

## はじめに

逆流性食道炎（GERD）は胃酸過多、酸性胃内容物の食道内逆流により生じ消化器疾患の中でも病態、治療法につき注目を浴びている。本邦でもLife styleの欧米化やH.pylori菌感染症例の減少によりGERD患者も多く、日常診療でも遭遇する機会が多い。これまでの諸家の報告によれば

GERDと肥満、Metabolic syndrome、骨粗鬆症との関連性が指摘されている<sup>1)</sup>。Kusanoら<sup>2)</sup>によれば本邦の高齢女性食道裂孔ヘルニアの大きさと脊柱後弯重症度は有意な相関性があると報告している。つまり閉経後女性は早期骨粗鬆症発症により脊柱後弯を合併し、結果として食道裂孔ヘルニアを生じGERDへと進展していくというセオリーが考えられる。因みに当院のように高齢者受診率の高い僻地診療所では骨粗鬆症性脊椎疾患による患者来院数が多いと同時に胸焼け、呑気、喉頭部違和感などの胃酸逆流症状を含めた上腹部症状を

Haruhiko NAGAMI

長見クリニック

連絡先：〒699-1311 雲南市木次町里方633-1